

街路樹

理科の授業改善の視点～調査結果を生かして～



発達障がいへの理解

「求められる科学的に探究する力」と「授業改善の方向性」

全国学力・学習状況調査(以下、全国学調)で4年ぶりに理科が実施されました。学習指導要領の全面实施から初の調査となり、理科で求められている「科学的に探究する力」を問うために、問題の傾向が大きく変わったことがメディア等で取り上げられました。

では、求められる「科学的に探究する力」とは具体的にどのようなもので、その育成を図るためにはどのような視点で授業改善を図ればよいのでしょうか。

理科で育成を目指す「科学的に探究する力」(小学校においては「問題解決の力」としている)の分析には、全国学調の問題に設定されている「**枠組み**」が参考となります。

各問題は、「**知識**」、「**技能**」、「**分析・解釈**」、「**構想**」、「**検討・改善**」という枠組み(視点)で作成されています。これを踏まえ問題を分析(正答率や誤答等)することで、目の前の児童生徒の強みや課題が明らかとなり、課題を解決するためには、「**探究の過程**」のどこに着目して授業改善を図ればよいかが見えてきます。全国学調の当該学年でなくとも、出題されている問題を参考にすることで、学習指導要領が求めている「**科学的に探究する力**」の**具体**が見えてきます。例えば**事物・現象から問題を見だし、検証するための実験計画が立てられるか(構想)**、**予想と結果が異なる場合に探究の過程をどう振り返るのか(改善・検討)**、**複数のデータをどう解釈し、分析して考察するのか(分析・解釈)**など、自校の全国学調の分析をすることは、目の前の児童生徒にとって必要な学びの場面や教師自身の指導の在り方を見直す機会となるはずです。(各校に配付される令和4年度全国学力・学習状況調査報告書をぜひご覧ください)

また、校種間のつながりも指導の大切な視点です。小学校で培った理科の「**見方・考え方**」を、中学校での学びへと生かし、高校で重視される「**探究**」の中でも活用できるようにしていきたいものです。学習指導要領に示されている学年の指導の重点も意識しながら、児童生徒が課題を自分事として捉え探究していくことで、育成を目指す資質・能力を育んでいくことができるような授業づくりを目指していきましょう。

「発達障がい」とは、発達障害者支援法において「**自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの**」と定義されています。

発達障がいは一見すると分かりにくいので、周囲が本人の困りに気付いたり、理解したりすることが難しいことがあります。また、同じ障がい名でも、特性の現れ方が違ったり、いくつかの発達障がいを併せもったりすることもあります。

例えば、アスペルガー症候群の人は「**空気が読めない**」というようなイメージが強いですが、逆に敏感すぎるが故に空気を读みすぎてしまい身動きがとれなくなっている場合もあります。「**発達障がいはこういうもの!**」と思い込んで支援をしようとすると相手を苦しめる結果になりかねません。支援者は一人一人と向き合い、その特性を理解しようと努力することが大切です。

障がいのあらわれ方は十人十色です。支援の方法も様々ですので、周囲の理解とサポート応援が大切になってきます。

大事なことは、目の前の子どもによく目を向けることです。どんなことができ、何が苦手なのか、どんなよさがあるのか……。発達障がいの子どもの言動には、その子なりの考えや思い、不安さや辛さがあります。その気持ちに寄り添うことが理解と支援に向けての第一歩となります。このような取り組みが、発達障がいの児童生徒にとってよりよい成長につながるるとともに、国が目指す「**共生社会**」の実現に向けた特別支援教育の充実にも通じると考えます。



研修主任研修より

今年度の研修主任研修は、現職教育に先進的に取り組んでこられた、郡山市の小中学校の先生を講師に迎え、「**現職教育の実際**」というテーマでご講義をいただきました。現職教育を推進するポイントをご紹介します。

○小学校 郡山市立芳山小学校 吉田 ひとみ先生

- ・教師一人一人が、学期に1回の研究授業を行う。全体では年間30回行う。
- ・子どもがやりたいことと授業者のやりたい授業が一致するような授業づくりを行う。
- ・授業参観では、授業者のねらいを目指す子どもの姿として見取り、その姿をもとに協議する。
「子どもたちは分からないことが分かるように、できないことができるようになるために学校で学ぶ」そのことを念頭において、教師自身もまた自ら学ぶ姿勢をもって授業づくりをしていく。



○中学校 郡山市立郡山第二中学校 五十嵐 堅一先生

- ・目指す生徒像は「**親和的な集団の中で、各教科が目指す深い学びを追究している生徒**」
- ・「**学級力アンケート**」を軸にした集団づくりを通して、親和的な集団を形成する。そのアンケートの結果を活用して、学級担任と教科担任が連携し、各学級が設定した重点項目を把握したうえで授業をする。

※学級力アンケートとは: 1達成力 2自律力 3対話力 4協調力 5安心力 6規律力 6領域24項目からなるアンケートでレーダーチャートで学級の様子を可視化するもの

教師自身の学びを止めないために、現職教育を推進していきましょう。